

「禍転じて福に」と祈り

節分大祭 雪の聖地に四千人参拝

大本

大本教団（出口聖子教主）では三日午後から四日にかけて、教団最大の行事である節分大祭を、京都府綾部市の教団聖地・梅松苑および同市内を流れる和知川などを舞台に執行、地元市民約千人を含む信徒ら約四千人が雪の聖地をふみしめて、厳粛な祈りのなか「国祖の大神」の再現を寿ぎ、神業奉仕の覚悟を新たにした。

この世の親神とされる国祖の大神・国常立尊は明治二十五年二月三日の夜、乱れた人類世界を根本から立替え立直して「みろくの世」を建設するため、出口なお開祖に神憑りしてこの世に出現した。

節分大祭は国祖の大神が再び地上神界の主宰神として復権したことを祝い、寿ぐお祭りで、天地・世界の邪気を祓い清める大祓の神事とともに毎年、聖地・梅松苑で節分の夜に執行されている。

大祭に先立ち三日午後六時四十五分から、知野茂樹総長、続いて出口聖子教主が長生殿で挨拶を行なった。

はじめに知野総長は、「私どもは開教の原点に立ち返り、親神さまの尊いみ教えをいっそう内に深めて、四代教主さまにお示しいただいています“信仰の内実化”の実現を期すべく、神業奉仕への新たな活動力とさせていただきたい」と大祭にあたっての決意を披瀝した後、兵庫県南部地震の犠牲者に哀悼の意を表明。

出口教主が「大本災害救援奉仕隊」に託した救援物資が多く被災者を勇気づけ、信仰の絆をより強固にしたことなどを述べた。また被災地在住信徒全員の無事が確認されたことを報告し、大本信徒、人類愛善会員に今後の被災地の復旧へ向けて一層の協力、支援を訴えた。

次いで出口教主は、地震の被災者にお見舞いの言葉を述べた後、ここ四、五年続いている自然災害や今回の地震での被災状況に言及。

京阪神地方の人々は首都圏と違って非常時の備えが充分でなかったようだと言及、「天災人災はいつどこで起こるかわかりません。これからは首都圏在住の方々のように、皆ができる範囲の備えをそれぞれがしておくべきでしょう」と今後の心構えを促した。

そして「年明け早々の大地震、被災地が大会及びその周辺のため、今後の日本経済に大きく響かねばよいがと案じられます。今後の復興にどれだけの時間がかかるかわかりませんが、とにかく前に進むしかありません。『禍転じて福となる』よう真剣に大神さまにお祈りさせていただきます」と参拝者に呼びかけた。

この後、長生殿では大本神諭拝読、神火を献ずるの儀が執り行なわれ、午後七時半前、広瀬静水人類愛善会長を斎主に節分大祭が厳かに執行された。

大祭では節分の日生まれた出口すみ子二代教主の聖誕祭、出口聖子現教主（二月十九日生まれ）の生誕祭、ならびに向こう一年間の五穀豊穡を祈る豊年祈願祭も行なわれ、それぞれ祝詞が奏上された。

大潔斎神事に続き人型大祓行事では、全国から寄せられた人型を祭員、瀬織津姫が一枚々々手に取って氏名等を読み上げ、壺の中へ納めていく。同日午後十一時から瀬織津姫行事に移り、祭員と壺を持った瀬織津姫が綾部市内を進んで和知川へ移動。神言奏上のなか綾部大橋上から祭員が壺の中の人型を流し清めた。

四日午前二時半には第二次の瀬織津姫行事が同様に執行された。

大祭行事の最後を締めくくる豆まきは同日午前四時前から、出口教主らによって長生殿内で行なわれ、「鬼（国常立尊）は内、福は内」の大本独自のかけ声にのってまかれた生豆を、参拝者は熱心に拾い集めていた。

お祓いをしながら商店街を和知川へ向かう祭員ら【写真は省略】